

2023 年度前期・後期 授業改善アンケート集計結果に対するコメント  
—文芸学部

学部長 木下 誠

2023 年度はコロナ禍の影響も落ち着き、基本的に通常モードの授業形態に戻りました。文芸学部では一部授業を教育的効果の観点からオンラインで開講しつつ、原則として教室での対面形式にて授業を実施しました。

以下、2023 年度授業改善アンケートを、2022 年度の結果と比較しながら見て行きます。設問 1 と 2 は、学生たちの授業への取り組み姿勢についてです。設問 1 の欠席回数は僅かながら増加しました。設問 2 「この授業を理解するために努力した」は、より良い結果となっています。特に回答が「4」よりも「5」が多くなっているのは、授業にのぞむ学生たちの積極的な姿勢を表しており、高く評価できると考えます。

設問の 3 から 10 は教員に対する評価ですが、大きな変化はありません。いずれも 4.5 前後の高い数値を示しています。設問 8 「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促していた」と設問 9 「教員から質問への回答や課題の返却・解説等が十分にあった」を比較すると、設問 8 の回答が若干低めですが、これは文芸学部の学問・教育内容の特徴を反映していると考えられます。すなわち、教室内でのその場の反応よりも、授業全体を踏まえた上で、学生が個々にしっかりと思考した後に、各授業終了時のレスポンスシートや授業時間外での課題等に取り組む姿勢を重視する、ということです。設問 9 の評価の高さからは、教員が十分にフィードバックをして教育効果をあげようとしていることが伺えます。学生の皆さんもそのような授業の特徴を理解している回答結果であると考えます。

設問 14 「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」は、4.43 と高い数値であり、しかも、「とてもそう思う」が 55.4% に達しています。いずれも 2022 年度よりもよい数値となっています。この設問 14 と比較的高い相関関係を持っているのが、設問 12 「この分野への興味・関心が引き起こされた」設問 13 「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」です。レベルが少々高めの授業もあるかもしれませんが、それは学生の皆さんの潜在能力を引き出すための、教員による期待の高さの表れとして理解していただきたいと思います。

「この授業で用いられた授業手法にすべてマークしてください」という質問から分かるのは、文芸学部では、以下の手法を取り入れている授業が全体の平均よりも少し高いことです。すなわち、「質疑応答」「学生によるコメントペーパー」「プレゼンテーション」「グループワーク」「ディスカッション」。他方、外部講師を招聘しての授業は全体平均よりも少なくなっています。

「授業を通じて身についた資質・能力」についての設問では、文芸学部においては、「この分野の知識、学力」「言語運用能力」が全体平均よりも高いのが例年の特徴で、今回も同様の結果を示しています。そのほかに、「構想力」「柔軟な発想力」「俯瞰力」「プレゼンテーション能力」が全体平均よりも若干高い数値を示しています。これらは演習形式の授業やゼミ等における取り組み、特に卒業論文執筆に向けて必要な能力の育成に関して、教育効果があがっていることを示しています。

以上